７回目の転生～初めての女の子～

里山隼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

７回目の転生～初めての女の子～

【Ｎコード】

Ｎ４４４５Ｙ

【作者名】

里山隼

【あらすじ】

機械音痴の天使の操作ミスのせいで死んでしまった福田優（ふくだ ゆう）は、神様に「世界を創造することができる天使」になるための方法を聞き、この目標をかなえるために１００回転生することになった。１～６回目までの転生を終えた優の７回目は、なんと女の子だった。はたして初めての女の子の人生はどうなるのか？

プロローグ?～6回目の転生最後～

「カァーカァー」
あ～今日も飛べるっていいよな～♪
さぁ今日も、食料探しに行こっと。今日は、何を探そうかな～…くるみは昨日食べた、肉は一昨日食べたから……オレンジの皮！そうだ！オレンジの皮探そう！オレンジ系は、三丁目に住んでる板倉一家がよく食べてたなんじゃ今からごみ箱あさりにいくか！！

……バサッ……バサッッ……バサッ……

「カァー！（ごみ捨て場発見！）」

……ゴソゴソ……ゴソ……ゴソゴソ…

「カァ～～～～～（発見！）」

……モグモグ……モグモグモグモグ……モグモグ…

「カァぁぁぁぁ～～～～♪（美味～～～～～～～～～～～～～）」

今日のオレンジも美味いな。愛媛産かな？
つーか板倉一家って毎回毎回1人4～6個ぐらいたべてるな…。こんなに皮が余るならいっそマーマレドでも作ればいいのにな。まあオレが食べるから残してくれた方がありがたいけどな。

んっっっ？何か眠くなってきたな？……今日は……2時間ぐらい前に起きたばっ…かだから眠く……ならないは……ずな…の…に……どうして……だ……

プロローグ?～天界～

「……。」

ん～ここは天界か?

あれか、好物食べてる間に毒殺されたのか……

まあオレが最初に死んでからもう５０年たって、増えすぎたカラス対策が始まったってことか。

そういえば、今までの経験からするとそろそろあいつが来るはず……。

「久しぶり～♪今回の人生は、どうだった?」

「カラスもいろいろ大変だってことが、よくわかったよ。人間だったころは、ウゼ～～、としか思わなかったけど、もうゴミあさりしね～と食べ物が手に入らないってことが、身にしみたよ。」

「そっか～。んじゃ取りあえずいつも通りに転生ダーツしよっか♪」

「了解」

は～、でもオレ、転生ダーツ――３回のダーツで次の転生先・種族・能力を決めること――嫌いなんだよな～。今まで、ホチキスとか木とかもひいたことあるもんな……

ま～取りあえず投げるか!!

シュッー

シュッー

シュッー

結果は、どうなんだ？

「っっっっ！！今回はすごくいい人生だよ。きっと。」

ん？どうゆうことだ？

「転生先は、険と魔法の世界、レイセンタス。種族は、人間。能力は、無限魔力・言語理解・記憶力増加よ。天使からみても、こんな人生はなかなかお目にかかれないわ。元はと言えば、わたしの機械操作ミスのせいでこんな生活にさせることになっちゃてるから、罪ほろぼしをした気分だわ。」

「マジか！！7回目にしてやっと人間界か。そうと決まれば、さっそくその世界に送ってくれ。」

「了解。では、いってらっしゃ～い。」

☆　☆　☆　☆

「あっ！！」

「ん？神様ところになにをしにきたんですか？彼なら今さっき逝きましたけど、どうしたんですか？」

「あいつの次の人生は、初めての女の子なんだ……。また、伝え

忘れた。」

「……マジですか。彼のこれからの人生はどなるのでしょうね……。」

第一章：登場人物（前書き）

人が増えたら、更新します。

第一章：登場人物

・アレフティナ＝リリ＝メルヴェル（主人公）

０歳：銀髪赤眼：元男の子、現在７回目の転生中。

・エディ＝ジョセフ＝メルヴェル

３０歳：金髪赤眼：宰相補佐官。武官を目指していたけど、ルイーズと試合をして負けてから、得意だった書類整理や、翻訳ができる、文官になった。かなりの切れ者、家族には甘い。

・ルイーズ＝マリア＝メルヴェル

２９歳：銀髪蒼眼：最強女性騎士。王立騎士団女性部隊隊長＆王立騎士団副隊長、見た目の割には、大雑把。

・アルフォンス＝クルス＝メルヴェル

７歳：銀髪蒼眼：長男。二卵性双生児。魔力が強い。将来の夢は王立魔道具研究室にはいること。

・アンネッテ＝ビアンカ＝メルヴェル

７歳：金髪蒼眼：長女。二卵性双生児。料理が大好きな、超合理的主義者。将来の夢は、女性初の宰相。

・アイラ＝エイニオ

２２歳：赤髪緑眼：アレフティナ＝リリ＝メルヴェル専属侍女。時に厳しく、時に優しくが座右の銘。裏表有り。

誕生&命名

「おぎゃ～～、おぎゃ～～～～～～、おぎゃ～～～～～～～～～～～～」
あ～～～～、人のおなかの中から出るのって、苦しいんだな。
高校のマラソン大会で、３０ｋｍ走った時よりもたいへんだったなー。

「元気なお子さんですよ。」

ん？医者か？
そういえば、現世での両親ってどんな人達だろう？

「ルイーズ、お疲れ様。さっそくだけど、この娘の名前をどうする？」

おっっ。今から俺の名前が決まるぞ。
てか、俺のお父さんカッコいいな～。身長は、１８０ｃｍぐらいか？しかもめっちゃ外人オーラ出てんな～。なんてゆ～か、金髪赤眼？イケメンさん？

「ええ、私はこの娘にアレフティナという名をつけたいです。」

うわっ！！お母さんすごくきれい。めっちゃ美人！！銀髪蒼眼で顔めちゃめちゃ整ってますね～。こんな綺麗でカッコいい人たちの息子に生まれてよかった～♪

「いい名前だな。さすがは、ルイーズ。でも私もこの娘にリリという名をつけたいから、この娘の名前をアレフティナ＝リリにしよう。」

「とても良い名前ですね。ではこの娘に挨拶をしなければいけませんね」

「そうだな。」

ん？2人がこっち向いたぞ。

「こんにちは、私たちの元に生まれて来てくれてありがとう。君の名前は、アレフティナ＝リリ＝メルヴェル。これからは、メルヴェル侯爵家の娘として、大変な事もたくさんあると思うが、必ず君をまもるよ。」

「こんにちは、私はあなたのお母さんよ。エディと一緒にあなたを必ず守るから、安心してね。」

……ム・ス・メ？

俺ってオ・ン・ナ？

娘＝女＝娘……

俺は、現世で女の子なのか？

「おぎゃ～～～～～～～～～～！！！（嘘だろ～～～～～）」

誕生日前日の願い

〜〜5年後〜〜

早く明日の私のお誕生日にならないかしら？

……キモッッ？

語尾にハートつけるとかキモッ？？
女の子ってどうして、かわいい感じに話せるのかが、本気で分からない？

ちなみに、これは、今までの転生生活の中で一番の疑問だ。
俺も、そのうち使えるようにならなくちゃいけないのか……。
今は、話し方を少し丁寧にするだけで、他の人は、元気で活発な女の子だと思ってくれるからいいけど、クルス兄とかアリア姉ぐらいの歳になったら、社交界デビューとかもあるから、かわいい女の子の話し方を習得しなくちゃいけない……。

まぁ、そのうちどうにかしよう♪
とりあえず、早く明日にならないかな。

メルヴェル家は、5歳になるまで魔法どころか、マナーレッスンさえしてもらえない。

それは、メルヴェル家初代侯爵（今は亡き俺のじいちゃん）が、メルヴェル家の3大家訓に【子供には、5歳まで俗世のことを教えてはいけない】というものをいれたからだ。

なんでも、俺のじいちゃんは、先代皇帝の双子の弟ととして、2歳から勉強をさせられ、自由な時間がなく、侍女に起きてから寝るまで監視される、という生活の苦痛さを、大人になり侯爵の地位をもらってからも、ずっと忘れることができず、自分の子孫には、あんな苦痛生活はさせない？といってこの家訓を創ったと、母さんに聞いた。（ちなみに父さんは、婿養子）

ってなわけで、俺は、今まで全く勉強できなかったんだ。

まぁ3歳までは、立つ練習とか、口から声をハッキリだす練習とかで、毎日することがあったからよかったけど、この一年間は、子供

向けの絵本を読んだり、クルス兄とビアンカ姉が暇なときに、一緒に遊んでもらうことしかできなかったから、ハッキリ言って暇だった。

しかも、基本的な文字の読み書きしかできないから、俺の誕生日に日にちとか、時間とかが、カレンダー的なものや、時計っぽいものがあっても、読むことができなかったんだ。

でも明後日からは、３人の先生が来て、マナーレッスン・今住んでる国の常識・武術、を教えてくれるんだ。

ものすごく、明日がまちどうしい。

だから、早く明日の誕生日になって欲しいんだ。

誕生日前日の願い（後書き）

変則的だと思うけど、週に２・３かい投稿できるようにします。

誕生日〜午前中〜

「×？☆、□×△＊○」

……誰？

「ティナ様、起きてください。本日の午前中に、奥様とお買物へ行く事をお忘れですか？」

！！！！！！！！

「ヤバっっ！！」

違う！！

「すっかり忘れていました。教えてくれてありがとう、アイラ」

これが、俺の女の子バージョン。……うん、下手だね。もっとうまく……上手にできるように練習しよっと。

っじゃなくて。
今日の午前中は、母さまと一緒にお買物にいくんだった。アイラ、俺付きの侍女として教えてくれたのはうれしいし、立派だと思う。けどさ、俺を起こしたあと俺の着替えの準備するのはやめて。アイラは、優しいから好きだけど、やっぱり着替えは一人がいい。女の人に下着姿を見られるのは、やっぱり恥ずかしい。

あ〜あ、楽しそうに服を持ってきたよ。
今日は、俺が寝坊したのが悪かった。明日からは、アイラがくる前に起きる。あきらめて着替えさせてもらおう。

うん!!やっぱり恥ずかしかった。

「ティナ様、これから食堂に行ってください。奥様が久しぶりに、家族そろっての朝食を、心待ちにしております。」

「めし……朝食ですね。了か……わかりました。すぐに行きます。」

やっぱり、いろんな人生6回とも全部が男だと、なかなか口調直らないよな！！
取りあえず、今は、ご飯。

☆　☆　☆　☆

「父さま、母さま、クルス兄さま、ビアンカ姉さま、おはよう。」

「おはよう。今日一緒に行く店は、私のお気に入りの店だから、期待してね。」

「おはようティナ。午後の誕生会では、ティナがびっくりするような、プレゼントがあるから、楽しみにいなさい。」

「ティナ、お誕生日おめでとう。」

「お誕生日おめでとう。今日の、私からのプレゼント期待してね。」

上から母・父・兄・姉からの、朝の挨拶の返事である。

それから、ご飯を食べ、家族みんなと話し、しばし団欒……

1時間（？）後

「じゃあ、ティナそろそろ行きましょう。」

「はい、母さま。」

あれ？

「母さま、クルス兄さまとビアンカ姉さまは、いかないんですか？」

「今日は、ティナと私、二人だけよ。嫌だった？」

「母さまを独り占めできるのは、うれしいです。」

「では、行きましょう。ティナ。」

「はい、母さま」

やったね。母さんと二人だ、なんだかんだ言って今までの人生、あんまり両親とか家族構成に恵まれなかったうえに、クルス兄とビアンカ姉がいたから、母さんと二人で買物するのは、初めてだから、うれしい。クルス兄とビアンカ姉は、大好きだけど、母さんはもっと好き。

そういえば、

「母さま、これから何を買いに行くんですか？」

何買うんだろう、今までは全部、父さんや母さんが買ってきてくれたから、自分で何か選んだ事がない。

「ドレスと装飾品よ。ドレスは、もう注文してあるから取りに行く

だけだけど、ネックレスとかは、自分で選ばせてあげようと思って。5歳になったから、そろそろ自分でつけたいもの、つけたくないものがあるでしょう？」

「……。はい？」

来た！！ついに来てしまった！！！
今まで自分から女の子用の装備を考えないようにしてたのに！！！！！！
ハハっっ！！だから今まで自分の姿を見ないようにしてたのに！！！！
まじショック……

「ティナ？着いたわよ。早く降りなさい」

「はい。」

来た、今まで入った事がない女の子のお店！！

ピンク～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～！！

きつい！！これはきつい。母さんには悪いけど、俺は、この店が苦手だ～～。

無理

☆　☆　☆　☆

結果的に言うと、買物楽しかった。

なんかごめん。

いや～。初めて自分の姿を鏡で見たんだけど、可愛かった。鏡で見た俺が、あんなに可愛いとは思わなかった。可愛い子の装備品考えるのがめっちゃ、あんなに楽しいとは……。これで、一歩女の子に近づけたと思う（たぶん）。自分に似合う髪飾りひとつ探すのに、絶対３０分は使った。買物は神！！楽しい！！これから絶対この店通う。

んでもって今日から、俺の目標に、

【絶対ナルシストにならない】

が、おめでたいことに、追加されました。拍手〜〜〜〜。

……誕生日なのに最悪……。

誕生日〜午後？〜

――――夕刻

カチャ

よしっ！！ブレスレットもした。昼間母さまに買ってもらったピンクのドレスも来た。アイラが結ってくれた髪もずれてない。男の俺目線から見てもかわっっ……キモくない！！！いつだれが呼びに来ても問題なし。

「ティナ様、パーティーの準備ができました。場所は大広間です。」

「りょ…わかりました。今行くｚ……ます。」

…まぁこの世界来て5年だから問題ないよね。ハハハハハハ……

……。

地味にショック。とりあえず大広間にいこっ…

ギギギ――――パタン

「『ティナ（様）、（お）誕生日おめでとう（ございます）』」

「父さま、母さま、ビアンカ姉さま、クルス兄さま、皆、ありがとう。大好き。」

うん、皆が祝ってくれたから。さっきの言葉遣いの間違いとか、午前中に発覚したナルシスト疑惑とかどうでもよくなってきたわ。おっ、料理長が前に出てきたぞ。

「今回のケーキは、チョコレートケーキでございます。」

マジか～～～。きたーーーーー！！早く家族がいるところに行って、メルヴェル家の誕生日恒例のケーキカッティングをせねば。誕生日の人から順に、食べたい量を切ることができるんだ。今日は俺の誕生日だから俺から切れる。しかも俺の大好きなチョコケーキ。マジ嬉しい。

とととととと……ボムっっ

「ティナ、ドレスのまま走ったら転んでしまうよ。」

「父さま。だってチョコケーキがあっちにあるんだ…よ。」

「大丈夫、チョコケーキは逃げないから歩こうね。」

ぎゅ

父さまに、手を握られたら走れない。俺のチョコケーキまで後５ｍもあるのに。父ひどい。

「さぁ、ティナ切っていいよ。っとその前に布をはがさないとね。」

「うん」

うわぁぁぁ出てきたーーー。綺麗にチョコでコーティングされてて、大きさが一辺１ｍの正方形。下に固めのパイ生地？かクッキー？っぽいのがあって、上は、ベリー系・オレンジ系・コーヒー粉？がかかってるところの３つにわかれている。どこも美味そうだ。

「ティナ、どこ切るか決まった？」

「はい、クルスに兄さま。」

俺は、オレンジのところを２０×２０くらいに切った。

「さすがティナ。ここぞとばかりにオレンジばっかりさすが。」

「兄さまだっていつもベリーのしか食べないじゃん。」

「むっ。」

「どっちも一種類しか食べないんだからいいじゃない。」

「「ビアンカ（姉さま）は、コーヒーしか食べないんだから、上からめせんでいうな」」

まぁ楽しい兄弟談話中に両親がケーキを切って、次に姉さまたちと、皆がどんどん切っていき、最後の１人まで切り終わった。

「ティナ、全員切り終わったみたいだから、よろしく」

「はい。母さま。では、森の恵みに感謝します。いただきます。」

「『いただきます。』」

「「「やっぱり、（オレンジ・ベリー・コーヒー）が一番おいしい！！」」」

俺と兄さまと、姉さまの目が合ってから

「あなたたち本当にそっくりね。」

と母さまに言われてたので、今は皆で楽しく兄弟言い争いもどきをし続けてます。

誕生日～午後？～（後書き）

用事があって投稿できませんでした。ごめんなさい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4445y/

７回目の転生〜初めての女の子〜

2011年12月4日02時06分発行